# 夏草かきわけて

吉田　道子
絵・森シホカ

京都の草太（そうた）の家にじっちゃんがきたのは、草太が一年生のときだった。じっちゃんは岩手でうまれ、そだって、ずっとそこにすんでいた。岩手はとうさんのふるさとでもある。草太はじっちゃんがはじめおっかなかったが、一年の夏休みにふたりでじっちゃんのふるさと、大槌まで旅行したことがきっかけで、うんと仲良しになった。

じっちゃんはひょろっとしていて、おかしなことをときどきやる。ビワの木にヒヨドリがきて実をついばむので、それをふせぐため、しゃもじや小さな鍋をぶらさげたこともある。風でゆれ、音を出しおっぱらう、という。みばがわるいのでやめてください、とかあさんにいわれ、今は手作りの色うつくしい風車がまわっている。

大槌の旅行もネコジャラシはらっぱのモグラにあいにいくというものだった。ばっちゃんがなくなり、草太の家にくるとき、モグラと別れの挨拶をしたのだそうだ。そのときのモグラがまだいるはずだ、といった。

車がビュンビュンとおる国道をみながら、

「この通りは昔国道ではなかった。のんびりしたもんだった。ブタのしりをわらしべでたたきながらいく人や、ウニを木のしゃもじで量り売りしていたリヤカー、馬ふんをひろってあるく人、それをけちらかした子どもたち」

そこで、じっちゃんはにたっとわらった。

「じっちゃんもやったんだ」と草太がいうと、

「ああ、いたずらはうんとな」

いいながら、じっちゃんは通りの店をながめていっては会釈していく。じっちゃんは長い間小学校の先生をしてい